

総合防除の普及推進を図るための令和6年度全国キャラバン (近畿地区) 概要

講評

京都大学大学院 農学研究科 教授 日本 典秀 氏

全体を通して感じたこと、学術的部分についてまとめたい。総合防除の根本的な考え方は複数の手法を組み合わせるというものだが、病害虫は1匹又は1株では場を全滅させるものではないということに立ち返る必要があると考える。今まで化学農薬防除中心の場合、病害虫をゼロにしようという考えで取り組んでいたと思うが、考え方を改めてほしい。まず、病害虫を入らないようにする。施設栽培であれば、防虫ネットは効果大。次に、入ったら増やさない。抵抗性品種等を活用することができる。入って増えてしまった場合、追い出すことは難しいので、殺すしかない。そこでこれまでは化学農薬に頼り切ってきたが、現在は天敵のほか、UV-BやCO₂のような物理的な防除など化学農薬以外の殺虫技術が増えてきているのでそれも組み合わせることが重要。化学農薬以外の殺虫・殺菌方法が少ない中で、新しい手法をいろいろな作物や地域に広めるうえで、このような情報共有の場は有効と考える。

今日の講演においてもイチゴの紹介が多かったが、付加価値が高く、お金をかける価値があることから、総合防除の取組が普及・確立してきており、良い教科書となっている。イチゴは、種から育てる植物とは違い、親株から病害虫が付いてくるため、定植までの防除が重要。似た栽培形態の植物にも広げていけば、総合防除は普及するのではないかと考える。

天敵について、誰でも使える技術にするような取組みを農研機構等でも行っているところ。カブリダニは湿度が必要な一方で、湿度を高めると病気のリスクが増大するため、バランスを考える必要があるが、そこでクロープナビのようなITが活用することができるのではないか。このように、新しい技術はあるので、事例を積み重ねてほしい。

最後に、総合防除キャラバンで得た技術を広く共有してほしい。病害虫にとっては県境のような境目はないので、病害虫防除に関する技術は全国で共有してほしいと考える。そのうえで、産地を守る取組みは栽培技術等によって続けてほしい。